

# 実際に作ってみました

続いて、子ども・ニックニュースの2019年度冬休み号の裏表紙に掲載した「災害の時に簡単に作れる料理」からクスクスとライスペーパーを使った簡単な料理を体験しました。



本誌の裏表紙に、ワークショップ時に試食したフィリピンの災害時には必ず準備される「ルガウ」のレシピを掲載しています。体が温まり消化のよい、おいしいおかゆです。一度作ってみてはいかがでしょうか。

# WSから見えてきたこと



今回のWSから、参加者の災害の基礎知識、災害に有効な減災行動に関する知識にばらつきがあることがわかりました。特に、自然災害の少ない地域から来た人たちは、今までその必要がなかったため、災害、防災意識が高くないようです。参加者から、外国人住民に対して防災の方法よりも、**防災意識の啓発**を優先させた方がよいのではないのでしょうか。」という声がありました。

**情報が伝わるのが遅い、避難のタイミングがつかめない**など課題もいくつか見えてきました。

例えば、「大型台風がこの地域に接近します」というニュースを見て、国籍に関係なく日本で生まれ育った人ならば多くの人はおそらく、外出できなくなったり流通経路が麻痺してライフラインが止まる可能性を考え、当面の食料を確保するために買物に出かけたり、備蓄の食料を確認します。しかし、台風の経験がない場合、その大型台風接近という情報をもたらす意味が伝わっておらず、何をどのように準備したらよいのか想像が難しいのです。参加者から「接近情報も大切だ

が、「そろそろ買い出しをしましょう。」とか「そろそろ〇〇をしましょう」という具体的な情報がほしい。」との声もありました。食品の備蓄については、毎日こまめに買物に行くのではなく、週に1回買い出しの日を決めて、ローリングストック法\*の考え方を習慣としている家庭もあるようです。彼らのストックを無駄にすることなく管理する方法は参考になります。

その他、参加者からも「いつもは言われることを聞いているだけだったけど、こうして自分たちで考えることで、楽しくなってきた。これからも、この経験を生かして、自分の住んでいるところでも同じようなWSなどに参加したい。」と地域と関わることを望む声も多くありました。地域活動に**主体的に関わる**ことは、他の住民とのつながりができ、災害にも強いコミュニティを作る一歩なのかもしれません。



\*ローリングストック法/定期的に食べて、食べた分を買っていき足していく方法。

防災という観点からすると、私たち日本人と外国人を分けている一番大きな要因は、言葉と偏見だと思われる。「言葉が通じない=言葉の壁」が外国人を災害要援護者だとしているとすれば、滞在年数が長くなり言葉が話せるようになれば、彼らが日本語以外の言葉も話せる特別な存在になり得るのです。そして、変わるのには彼らだけではなく、私たちがたとえば「やさしい日本語」を心がけるなどの意識を持てば、その壁はさらに低くなります。

こうした気づきが一人ひとりの意識を高め、不幸にも発生してしまった災害に誰もが持てる力で共に立ち向かう経験が、私たちがより深く結びつけ、地域の力を高めていくはず。安心して暮らせる社会の実現に向けて、皆と一緒に困難を乗り越えていきましょう!

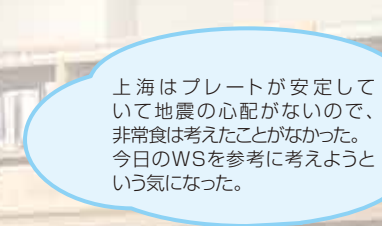
# 参加者コメント

最後に参加者の声をまとめました。



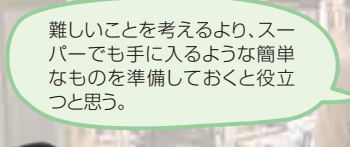
ビビアナさん (メキシコ)

メキシコでは地震はしばらく起きていなかったが、2年前に大きな地震があった。日本からのレスキュー隊の活躍を覚えている。日本で地震や台風の経験をしたので、いろいろ準備している。今日のWSは自分にとって勉強になった。



カクさん (中国)

上海はプレートが安定していて地震の心配がないので、非常食は考えたことがなかった。今日のWSを参考に考えようという気になった。



アニスさん (パキスタン)

難しいことを考えるより、スーパーでも手に入るような簡単なものを準備しておくと思つとる。



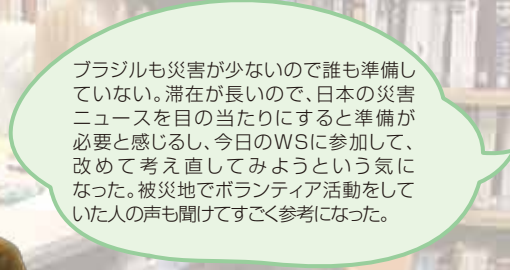
バエさん (フィリピン)

フィリピンでは災害時によくおかゆをつくる。今日はそれを作って持ってきた。



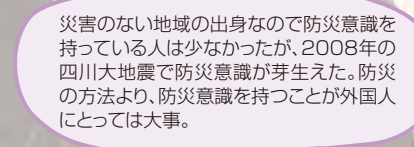
シンシアさん (フィリピン)

非常時は一つの心になって一緒に頑張ろう。



ミチコさん (ブラジル)

ブラジルも災害が少ないので誰も準備していない。滞在が長いので、日本の災害ニュースを目の当たりにすると準備が必要と感じるし、今日のWSに参加して、改めて考え直してみようという気になった。被災地でボランティア活動していた人の声も聞けてすごく参考になった。



シンさん (中国)

災害のない地域の出身なので防災意識を持っている人は少なかったが、2008年の四川大地震で防災意識が芽生えた。防災の方法より、防災意識を持つことが外国人にとっては大事。



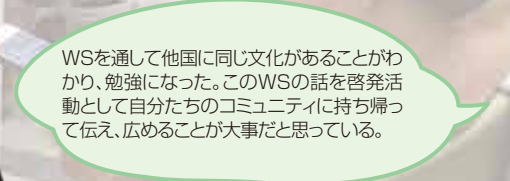
ヨケットさん (タイ)

タイ人は川で体を洗ったり、魚も取って食べている。水も地面を掘って湧かしてのもので、災害時でも普通にできるが、日本ではカップラーメンの準備をしている。



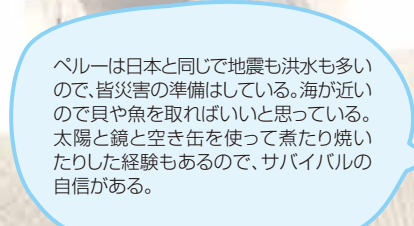
ホアさん (ベトナム)

日本語学校でも災害や避難の授業があった。災害の少ない故郷だったので、避難するということは、死と隣り合わせという恐怖があったが、今日のWSで避難所でも楽しくできそうとわかり、不安が和らいだ。



エリカさん (ベルギー)

WSを通して他国に同じ文化があることがわかり、勉強になった。このWSの話を啓発活動として自分たちのコミュニティに持ち帰って伝え、広めることが大事だと思っている。



ビクトリアさん (ベルギー)

ペルーは日本と同じで地震も洪水も多いので、皆災害の準備はしている。海が近いので貝や魚を取ればよいと思っている。太陽と鏡と空き缶を使って煮たり焼いたりした経験もあるので、サバイバルの自信がある。



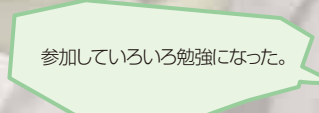
レオさん (ベルギー)

乾物と他のものと併せることでおいしく食べられることが分かってよかった。



キヨミさん (ブラジル)

災害の経験がないので実感が湧かなかった。お湯を使って作れるものを準備しておけばいいかなと思った。災害時は避難所で何かを待っているのではなく、何人かが集まって今日のようなWSで何をつくるかと考えれば、避難所でも楽しく過ごせるかなという可能性が見えた。



ルーさん (ベトナム)

参加しているいろいろ勉強になった。